今ここで頑張っています

今日も自分なりに頑張っています

株式会社資生堂　アドバンストリサーチセンター　先端技術研究グループ
関根知子

1993年に応用化学科の西出研究室を学部で卒業し、(株) 資生堂に研究員として就職しました（その翌年から研究職の採用が院卒以上となった)。男性の多い理系職の中で、女性であることを活かせる化粧品会社への就職を希望していましたが、中でも「ヒトを彩るサイエンス」という資生堂の当時のスローガンに特に強く惹かれました。化粧は間違いなく文化の一つであり、日本の文化をサイエンスの力で創造する仕事ができるなんて、なんて素敵だろうと思ったからです。以後25年、資生堂で「頑張っています」。長い社会人生活の中で、今思うとあれが人生のターニングポイントだったんだな、と思う出来事とその時に感じたことなどを書こうと思います。

◆研究の製品化

卒業論文のテーマは高分子錯体でしたが、入社してまず与えられたのは、皮膚の最上層である角質層の中の、細胞間脂質に関するテーマでした。大学の研究室での在籍期間が短かったこともあり、卒論の研究内容と少しもかぶる所がなくても全く気にならず、目の前の研究に没頭しました。一方で、大学院を出た人と違い、自分には専門分野と呼べる学問分野がないことはコンプレックスでした。入社３年目に界面科学を研究する基礎研究部門に異動になり、そこで新しい乳化法を日々研究することとなりました。新しい、といっても、使って下さったお客さまがハッピーになれるような技術でないと意味がありません。毎日使う化粧品であれば、使って楽しい、気持ち良いことが大事だと思い、「マッサージしている間に感触が変わるクリーム」の研究を行い、製品化されました。マーケティング部門から製品の提案があり、彼らがイメージした基剤を作って世に出すという流れが大多数である中、基礎研究が製品化されるという幸運に恵まれ、これがきっかけで学会活動にも積極的に参加するようになりました。当時の上司に言われたのは、こんな幸運はそうそうないこと、だからこの研究に関しては業界の第一人者になれということ。そうなると、学卒であることのコンプレックスが益々頭をもたげてきたのを覚えています。

◆出産と研究の低迷期

33歳と36歳の時に出産し、それぞれ９か月、１年半の育児休業を取りました。育休後、なんとか仕事で会社に貢献したいと必死でしたが、この頃の研究は全く製品に結び付かず、研究職は向いていないのかもと思い始めていました。その矢先、まだ製品化されていなかった「使用中に感触が変わるパウダー」の研究報告書を読んだ新人が、これを自分なりにアレンジしたいと言ってきました。私の視点とは違った彼のアイデアのお蔭で再び脚光を浴びることとなり、なんと製品化が決まりました。全く今までにない基剤だったため、素材、処方構築、スケールアップ、容器のそれぞれの分野のプロが集結し、２年の歳月を経て製品化されました。全員が相補的に取り組んだ貴重な経験でした。研究は、一人で抱え込むよりも皆と共有する方が、より高いレベルに到達できるのだとしみじみ思いました。

◆海外とのやりとりと学位取得

英語が比較的得意だったこともあり、30代後半から海外との共同研究を担当することが多くなりました。海外では学位を取得してから研究職に就くことが比較的当たり前で、学会でも名刺にDr.の文字がないとちょっと肩身の狭い思いをします。学位が欲しいけどそろそろ自分も40歳、子育てしながら頑張れるんだろうか、という迷いを払拭してくれたのは、学会で知り合いになった同業他社の研究員の方々でした。毎朝４時半に起きて一通りの家事を終えた後、３～40分だけ論文執筆のための時間を取る、という生活を２年半続け、43歳の時に東京理科大学で学位を取得しました。皮肉なことに、この学位論文の殆どの内容は、私が製品にならない研究を行っていた際のお仕事です。あの時一生懸命取り組んでいてよかったと思いました。名刺に印刷された「博士（工学)」の文字はとても眩しく、その４文字が入っただけで、研究員としての責任が重くなった気がしました。

◆今

私の夫も資生堂の研究所に勤務しており、今なんと、夫が上司の上司というやりにくい立場にいます。意にそぐわない状況でもとりあえず１年は頑張ってみる、という自分のモットーに従って、今日も頑張っています。